

食人文化と人間の認識（その1）

一 日本語・英語・スペイン語・ルーマニア語カニバリズム表現における ジェンダー言語態への認知言語学的アプローチ

福森 雅史・森山 智浩

1. はじめに

本稿は、言語の側面から「食人文化と人間の認識」を見つめることをテーマに2回に渡って論じる前半部に当たる。社会学や文化人類学など、これまで多くの研究者が人間の食人文化を考察してきた（cf. Harris (1977), Attali (1979), Arens (1979), 吉田 (1988), 吉岡 (1989), Sanday (1986), Bataille (1973, 1977)）。性的カニバリズムに焦点を絞っても同様で、言語学分野では主に社会言語学（特にジェンダー研究）がその任を担ってきたが、そこではあくまでも「性差」としての言語表現が扱われ、性の対象物としての「女性観」の域を出ないものであった（cf. 平賀 (1997), 熊抱 (2006)）。これらは語彙に現れる性差を見る上で非常に優れた研究である一方、女性を対象とした表現数より劣るものの、「年下の男ばかりをつまみ食いしている」や「他の男を漁っている」といった隠喩表現など、男性志向のカニバリズム表現も存在している。また、根源領域（source domain）の選択には感覚運動経験（sensorimotor experience）や社会文化との相互作用によって生じる人間の本性の産物（products of human nature）が大きく関わっている（cf. Lakoff and Johnson 45-46, 117-118）。こうした事実を鑑みると、社会情勢に関する「強者から弱者へ」という本能こそがパラメーターとなって女性志向／男性志向表現という定項が同定されるのであろうが、そうした性的食人性が人間の無意識的意識に本来的に備わっているとすれば、社会言語学の枠組みを超えて（もしくは学際的に）、それを言語として具現化させるフレーム（frame）およびスクリプト（script）が如何なるモノかを明らかにする必要がある。また、食人表現の隠喩における根源領域選択のメカニズムについては、その「外側」に存在する社会・文化的ゲシュタルトとの相互作用のプロセスを、さらには、そうした認識メカニズムが異言語間にまたがって存在している人間言語文化であるのかどうかという反証可能性をも見つめる必要がある。そこで、本稿では、脳科学の枠組みにおいて言語文化に根差した隠喩・比喩表現論を中核とする認知意味論（Cognitive Semantics）の諸理論を採用し、第二章ではまず、食人研究における社会学・文化人類学的諸相を鳥瞰した後、言語学において食人認識を見つめるさらなる研究意義を問う。そして、第三章では身体部位の参与者の中でも性的食人表現に胸部がプロファイル（profile）されるためのベー

ス (base) として人体構造化認識に光を当てて一方、第四章ではそうした表現に選択制限が生じる場合には食文化に関する民族言語文化の相違が目標領域 (goal domain) を規定するためのトリガー (trigger) となる投射関係 (projection) を明らかにする。その後、第五章では、第二章－第四章で観察された性的食人表現を成立させる経験のゲシュタルト (experiential gestalt) が如何なるスクリプトによって構成されているのかを図地分化 (figure / ground segregation) の観点から論じ、最終的には、そこから導き出されたフレームが理解行為に関する構造のメタファー (constructional metaphor) をも支える動物性として明確な境界を表さない内在性 (immanence) を持ち得ることを確認する。なお、第二章では現存するカニバリストの証言を研究題材として扱うために主にパリ人肉事件を採り上げるが、第二章－第五章における論述内容のさらなる妥当性を検証するために、その事件当事者の数々の言語表現との認知的整合性も適宜確認する。

2. 研究意義

2.1. 食人研究における社会学・文化人類学的諸相 — パリ人肉事件も交えて —

今から約 30 年前の 1981 年 6 月 11 日、日本全土を震撼させる事件が発生した。いわゆる「パリ人肉事件」である¹⁾。博士課程を修了するためにフランス留学中であった佐川一政 (さがわ いっせい) 元被告 (当時 32 歳) (以下、敬称略) によって、級友であったオランダ人留学生レネ・アルテベルトさん (当時 25 歳) が銃殺され、遺体発見の 2 日後に逮捕に至った。この事件で世間の注目を集めたのが、「食す」ために犯行に至った佐川の「狂気性」であり、その異常な動機づけに対する日本国民の反応が如何ようであったかは以下の当時の新聞記事からも読み取れる。

(1) a. 学友オランダ女性を邦人留学生がバラバラ殺人 パリ

死体の一部たべる 首相訪問前、世論わく

【パリ十六日＝宝利特派員】日本人留学生が同じ大学に学ぶオランダ人女性を殺害、死体をバラバラにしてブローニュの森に捨て、体の一部を食べていたという異常な事件が十六日、明るみに出た。犯行の動機は、求愛を拒まれたためと自供しているが、パリの新聞報道では女性の足にクギを打ち、鼻、くちびる、乳房などを刃物でそぎ取る「儀式殺人」を行っていた。鈴木首相のパリ入りを二日後に控えた十六日、仏マスコミはこの残忍な犯罪を大々的に報じており、欧州での対日感情への影響も心配されている。

パリ警視庁の十六日の発表では、犯人の日本人は神戸市生まれ、パリ十六区エルランジュ通り、佐川一政 (三二) (本国の住所、東京都文京区大塚二の四

の八）で、パリ第三大学（通称ソルボンヌ大学）で比較文学を専攻、被害者は同大学のオランダ人女性、パリ六区ボナパルト通り、レネ・アルテベルトさん（二五）。レネさんは黒い髪の長身の美人だったという。

十三日夜、パリ郊外ブローニュの森で、アベックが池のそばのしげみの中に隠すようにして置いてあった二つのスーツケースを発見したのが、事件の発端。うち一つを開けたところ、中に切断された人間の手が見えたため二人はあわてて警察に通報した。

駆けつけた警察が調べたところ、一方のスーツケースから人間の頭の部分と手足、もう一方から胴体の部分が見つかった。

パリ警視庁ではただちにバラバラ殺人事件として捜査を開始、十五日になって遺体の指紋などから身元がレネさんであることが判明した。また、警察が探し出した目撃者（複数）の証言から、アジア系の男が十三日、遺体発見現場の近くでタクシーを降り、二つのスーツケースをのせた手押し車を押していたことがわかり、レネさんと交友関係のあった日本人「佐川」の存在が浮かび上がった。

パリ警視庁は十五日、佐川から事情を聞いたところ、レネさん殺害を全面的に自供したため、ただちに殺人、死体損傷、遺棄容疑で逮捕した。

自供および解剖所見によると、佐川は十一日深夜から十二日未明にかけて、エルランジェ通りのアパートの自室でレネさんを殺害した。

佐川は同じパリ第三大学に通うレネさんと先月知り合った。佐川は十一日、レネさんを招待、レネさんがこれに応じ、同日夕、十六区の佐川のアパートを訪れた。夜になって佐川がレネさんに「泊まっていけないか」と誘ったところ、レネさんは「そんなバカな」と冷たくあしらった。このレネさんの冷たい態度に腹を立てた佐川は、持っていた22口径ライフルでレネさんの頭を撃ち抜いて殺害した。

十六日付の仏大衆紙ル・パリジャンが伝えたところによると、片方の足にはクギが打ちつけられており、乳房、くちびる、鼻が刃物で切り取られ、腹部も開かれて内臓が取り出されており、性倒錯した「十字架」処刑と呪術的な儀式が行われたとみられる。

佐川はこのあと、遺体を二つのスーツケースに詰めて、タクシーを乗り継いで運び、ブローニュの森へ捨て去った。しかも、佐川は死体の一部を自室の冷蔵庫に“保存”、肉の一部を十二日夜と十五日昼の二度にわたり食べたことを自供した。

— 『読売新聞』（昭和56年（1981年）6月17日（水曜日）朝刊、第一面）

b. パリ留学5年目、倒錯の惨劇

射殺……鼻，乳房切る「求愛拒否されカット」佐川自供

パリの国立大学に留学中の日本人学生が，同じ学部のオランダ人女子学生に求愛，断らわれカットとなり，射殺した上，死体をバラバラにしてその一部を食べるといふ猟奇殺人事件は，パリの在留邦人だけでなく，日ごろ，物事に動じないパリっ子たちにも大きなショックを与えた。この衝撃的なニュースを聞いた東京に住む犯人の父親も「まさか息子が…」と，あまりのことにぼう然とするばかり。自動車輸出など経済問題をめぐって，ただでさえヨーロッパ人の日本への反感が強まっている時だけに，「野蛮な日本人」というイメージが排日感情に輪をかけることにならなければよいが…」と外務省関係者らも憂慮の色を隠せない。

スーツケース 手押し車買う

セックスを拒否されただけで，佐川は一体なぜ“恋人”を殺害し，バラバラにして，その一部を食べるといふ信じられないような，残虐行為に走ったのか――。

「私はカットとなり，何が何だか分からなくなってしまった。そして，ライフル銃を彼女の頭部に発射した。死体の処理に困り，料理用の包丁数丁で彼女の体を切り刻んだ。翌十二日，近くのスーパーマーケットに行き，スーツケース二つと手押し車を買って来た。遺体をスーツケース二つに詰め込み，タクシーを呼んだ。パリ市内を回ったが，捨てる場所が見つからなかった。そこで，数時間後，別のタクシーをつかまえて回ったが，ムダだった」

レネさんを射殺した上，手足をバラバラにし，腹部を開いて内臓を取り出し，鼻，くちびる，乳房を切り取ったといふ佐川の何とも言いようのない異常な自供はさらに続いた。フランス通信が警察発表として伝えたところによると，佐川が彼女の遺体から肉片を切り取り，冷蔵庫に“保存”，その一部を食べたといふ，佐川は「これまで長い間，若い女性の肉を食べたいとあこがれていた」とも供述したといふ。

—『読売新聞』(昭和56年(1981年)6月17日(水曜日)朝刊，第二三面)

公判が始まり，佐川は犯行を自供する。しかしながら，「極度の心神衰弱であった」といふ理由から犯行当時の責任能力を問うことができず不起訴処分となり，アンリ・コラン病院への無期入院の判定が下された。

そんな彼が，Web magazine の *VICE* (<http://www.viceland.com/jp/v5n6/htdocs/whos->

hungry-502.php) (アクセス:2011年10月10日) のインタビューに応じ, “WHO'S HUNGARY?” のタイトルで当時の事件背景および現在の心境を赤裸々に語っている。下記には, 当該インタビューの応答で, 本稿の研究内容に関する部分をできるだけ詳細に抜粋した。

- (2) 「そういった女性の肉を, 殺して食べたいというよりは単純に“カジってみたい”と強く思う様になりました。そうした欲望はまさに性欲そのモノで, 例えばハラが減っていると女性を食べたいという気持ちも起きないんです。でもある程度なにか食べて満たされると, だんだんとアレも勃って来ますよね? そうなると“食べたいなあ”と思うんです。矛盾してるでしょ? だからコレは, 本来の食欲じゃないワケですよ。“ヒトの肉を食べたい”という食人欲望は僕にとって性欲みたいなモノだから, どんどん射精していかないと, もう高まる一方なんです。」
- (3) 「それでまずはオシりを切り始めたんだけど, いくら切ってもトウモロコシみたいな皮下脂肪ばかり。ようやく出てきた赤身の肉を指で引きちぎって口の中に入れたときなんかもう, 歴史的瞬間だと思いましたね。でも別に快樂殺人のように, 肉を切りながら快樂を感じていたワケではありませんから, このコトを思い出して話すのはスゴくしんどいんですよ。彼女が死体になっちゃった時も“しまった, 大切な友達を亡くしてしまった”と思いましたから。僕がホントに食べたかったのは“生きた彼女のお肉”だった。…それまでもオンナのコの友達は沢山いましたけど, 食べようなんて思ってもみませんよ。それは人格のあるヒトとして見なしてるワケですから。「愛してたから殺して食べたんだろ?」とかよく言われるけど, 愛してたらわざわざ殺して食べやしませんよ。」
- (4) 「最初はオシりに直接カブリついてそのままカジろうと思ったけど, そんなのとてもないです。人間の皮膚はとても分厚いですから, むしろアゴの方が痛くなるくらいで。まあ菌形はつきましたけどね。クリトリスだけは, ちょうどそのとき彼女は月経だったみたいでモノスゴいニオイがしたから, もう噛めずに陰毛と一緒に飲み込みました。でもそのときは初めて性的な快感というか, 体中が燃えるようなカンジがしましたよ。それから, ウシやクジラなんかだと, 獣のニオイがあるでしょ? それがヒトの場合はそういったニオイがまったくないんですよ。だからきつと, あらゆる肉の中でも一番美味しいのがヒトの肉なんだと思います。とにかくケモノ臭さがない。逮捕される直前に食べたときは, もう数日経ってたせいか, より甘味が増えて美味しかったですね。それから足のウラの肉ってのはクサくてマズかった。いちばん美味しいのはクビの肉です。上半身に行けば行くほど, 繊細な

味なんです。それから舌。そのまま口から引っ張り出して噛みました。でもまあ、クビも舌もあんまり肉がありませんから、食べるんだったら太モモですね。」

- (5) 「そんな観念的なモノじゃなくて、あくまでも“フェティッシュ”なんです。食べるというよりはちょっとかじって味見してみたかっただけのことで。だからもちろん今でも、“キレイな女性の肉を食べたい”という性的感情はありますよ。だってそれは、普通の人でも好きな女性が出来たら何回だって会いたい、近くにいたい、彼女のニオイを嗅ぎたい、接吻をしたいと思うじゃないですか。僕の場合はその延長線上に“食べる”というのがあるだけで。でもそれはもちろん一般的には通じないし、通じるワケがない。でも“食べたい”と言っても、相手を殺しちゃったらダメですね。それだと、“モノ”になっちゃうから。だから食べるんだったら、ちゃんと生きているまま食べたい。」
- (6) 「特に6月みたいに女性が肌を見せ始める季節になると、食いたくて食いたくてしょうがなくなっちゃう。今日も、駅へ向かう時にオシリのキレイな女性がいたけど、ああいうの見ちゃうと“死ぬまでにもう一度食いたいなあ”と思っちゃいますね。出来れば日本人の女性を食べてみたい。それからなるべく素材の味を活かすためにも、スキヤキとかシャブシャブがイイですね。」
- (7) 「ウンコは流石にないけど、オシッコと唾液はいつも飲ませてくれるコがいました。まあそのコが結婚してからは流石にムリですけど、それまでは直接僕のアタマの上におっ立ってオシッコ飲ませてくれて。それがまた美味しいんですよ、ニオイも少なくって。そのコが赤ちゃんを産んでからもうちに遊びに来てくれてましたが、流石に前みたいなのは出来ないから、オシッコをペットボトルに入れて置いていくんです。でも不思議なことに、もう飲めないんですよ。“赤ちゃんの世話をするお母さん”という生活感がモノスゴく漂っているからなんでしょうね。ヒドい言い方なんだけど、彼女を女性としてもう見れなくなっちゃったんでしょう。」

— VICE MAGAZINE (<http://www.viceland.com/jp/v5n6/htdocs/whos-hungry-502.php>) (下線・一部省略筆者)

ここでも（現代文明社会に属する我々の視点から見て）彼の「狂気性」、 「異常性」が改めて浮き彫りとなるであろうし、また、（我々の文化圏内の）社会慣習面においてもそれを実際の行動に移すことはもちろん許されるべきではない。しかしながら、人類の歴史を振り返ると、トーテミズムに代表される宗教観に基づき、「社会行為」としてのカニバリズムそのものはとり立てて奇異な行動習慣ではない。族内食人としては日本に残る「骨噛み」²の慣習も「食人によって死者の魂や肉体を分割して受け継ぐことができる」と信じた思

想・観念の一例であろう (cf. 吉岡 (1989: 284-285))。また、次の (8) は族外食人行為ではあるものの、人肉が強壯剤 (場合によっては媚薬) の一種になり得ると捉える思想も同様のコンテクストに含まれる³。

(8) 中国産の人肉カプセル密売 ソウルの薬剤市場と韓国誌

2011.7.21 23:30

韓国の有力月刊誌「新東亜」8月号は、死産した赤ん坊や生後1～2カ月の乳児の人肉からつくられた粉末入りのカプセルが中国から韓国に流入し、ソウルの薬剤市場でひそかに売られていると報じた。

韓国関税庁が近く検察当局に捜査を要請する予定という。

同誌によると、今年初めに寄せられた情報を基に、中国現地で韓国に流入しているのと同じカプセルを同誌が入手。関税庁の協力を得て国立科学捜査研究所で成分分析を行った結果、遺伝子情報が人間のものと99%一致した。材料となる乳児の遺体などは、ブローカーが吉林省延辺朝鮮族自治州図們市の病院から買い取っている。

同誌の取材では、ソウルの薬剤市場に持ち込まれたカプセルは、大病を患った人に効く妙薬として100個当たり70万～80万ウォン (約5万2千～6万円) で密売されているという。(共同)

— MSN 産経ニュース (2011.7.21) (<http://sankei.jp.msn.com/world/news/110721/chn11072123320011-n1.htm>) (下線筆者)

(アクセス: 2012年1月10日)

さらに、以下 (9) に示されるように、粟屋剛氏は著書『人体部品ビジネス』で、臓器移植や流産胎児、胚の医療目的の人体利用についてもカニバリズムの一種、すなわち「ネオ・カニバリズム」として規定している⁴。

(9) 人類は、形を変えて、すなわち、ソフィストケートされた形で、カニバリズムを再開する可能性がある。私はそれを「ネオ・カニバリズム Neo Cannibalism」と呼んでいる。ネオ・カニバリズムとは、未来社会における人肉の加工食品としての利用 (および商品化) である。私は、現代における人体の徹底利用と商品化の延長線上にネオ・カニバリズムを見る。それは、仮に、実現するならば、人体徹底利用および商品化の、おそらくは終着駅である。

私は、数年前に、半ばSF物語として (三分の一くらいはまじめだった) このネ

オ・カニバリズムについて書いた。現実には、臓器や組織の供給の問題は、やがて、人工臓器や動物臓器の開発あるいはそれらのハイブリッド臓器の開発、さらには再生臓器の開発などという形で解決されるであろう。また、食糧の問題は、バイオテクノロジーやEMなどのテクノロジーおよび国際規模の適切な食糧政策——たとえばFAO(国連食糧農業機関)などによる——によって解決されるだろう……と期待している。しかし、後述するように、臓器移植や脳死身体の各種利用、広く人体の徹底利用を正当化する三つの原理、すなわち生命功利主義、物的人体論、および自己決定の原理は、明らかに、ネオ・カニバリズムまでその射程内に入れている、ということをおぼろげに忘れてはならないだろう。

— 粟屋 (1999: 219-220) (下線筆者)

しかしながら、佐川が語る「性的感情」は上記と明らかに趣を異にしている。つまり、「非社会的行為」に属するカニバリズムである。確かに、ウルグアイ空軍機571便遭難事故(1972年)やアメリカ合衆国開拓者キャラバン・ドナー隊のシエラ・ネヴァダ山脈山中トラッキー湖畔における遭難事故(1846年)など、非カニバリズム文化圏の人々についても、過去に数例の非社会的食人行為が報告されている⁵。ただ、これらはあくまでも「緊急事態下における食糧補給」という合理性を伴った行為であり、さながら戦場における兵糧補給や飢饉時の食料確保と等価の意義を持つ点で、上述の性的感情に基づく人肉嗜好とは区別されるモノである。では、現代の文明社会において、佐川が述べるような性的カニバリズムが稀有であるかと言えば、特異ではあっても特殊ではない。事実、ブルックリンの吸血鬼として知られるAlbert Hamilton Fish、ミルウォーキーの食人鬼の異名をとるJeffrey Lionel Dahmer、犠牲者の肉を缶詰の豚肉と偽って売り歩いたと噂されたFriedrich “Fritz” Heinrich Karl Haarmann、赤い切り裂き魔の呼び名で知られるAndrey Romanovich Chikatilo、アメリカ殺人史を代表する1人であるEdward Theodore Gein、さらに食人志向を強めたNikolai DzhumagalievやCarl Friedrich Wilhelm Großmannなど、性的カニバリズムを実際の行動に至らしめた種々の事件も枚挙に遑がない。

上記に見られるようなカニバリズムそのものの研究は文化人類学や社会学など多くの分野でなされてきた(cf. Harris (1977), Attali (1979), Arens (1979), 吉田 (1988), 吉岡 (1989), Sanday (1986), Bataille (1973, 1977))。また、Francisco José de Goya y LucientesのSaturno devorando a un hijo(邦題:『わが子を喰らうサトゥルヌス』)に関するものなど、芸術分野における同研究も盛んである(cf. 小山田 (2002: 67-73), 大高 (2006: 112-113), ハーゲン, ハーゲン (ワタナベ (訳)) (2004: 75-76))⁶。次の(10)に示されるように、カニバリズムが「人間の本性の産物」の一つであり、それを倫理として封じるもの

が宗教や（それによって形成される）道徳であるとするならば、多角的な方向から研究する必要があるのも合点がいく⁷。

- (10) 多くの原始社会では、諸個人あるいは諸種族にとって、病気であるとはすなわち死の脅迫のことであり、餌食を、道連れを求め死者の魂に侵されることに他ならなかった。療病するとは、ならば、死者の魂と闘い、それを遠ざけるということになる。そしてそのために最初に編み出されたものが、死者の魂の器を食べること、つまり、死者の屍を生者の身体の中に閉じ込めることによって、その魂を引き離し、もどれないように遠ざけるといった巧妙な策略である。治療のためのカニバリズム、それは原初的で持続的な秩序、しかし、不気味で脆弱な秩序である。というのも、それには捕食、人間狩り、略奪が伴うからだ。それに殺すことにつながる。持続するにはあまりに危険であるが故に、カニバリズムは姿を隠す。だが、消え去ってしまうにはあまりに不可欠であるが故に、それは舞台上上がる。この秩序は見世物、つまり《悪^{マル}》の厄除け儀礼となる。

— アタリ（金塚（訳））（1984: 4）（下線筆者）

2.2. 言語学における食人研究 — 性的カニバリズム表現に見るジェンダー言語態 —

その一方で、「言語面」から見たカニバリズム、それも性的カニバリズム認識に関する言語文化学的研究は、筆者の知る限り、これまで存在していない。確かに、平賀（1997）では、「我々が日常何気なく使っている言語表現のなかには、女を品物として隠喩化し、その商品性や食物性を強調しているものが数多くある」（平賀（1997: 124））ことを、実例を挙げて説明している。また、その根底には「女は品物だ」・「女は商品だ」・「未婚の女性は商品だ」・「夫（の家）は妻を買う」・「結婚は売買だ」・「女は食べ物だ」・「女は果実（野菜）だ」・「男は女を食べる」・「セックスは食事だ」という隠喩概念が存在していることを指摘し、そこに見られる「性の対象物」としての女性観について述べられている。熊抱（2006: 225）においても同様である。しかしながら、こうした研究はいずれも社会言語学（特にジェンダー研究）的見地に立脚したものであり、本稿の趣旨とは一線を画する。なぜなら、いずれもが、なぜ女性は「食べ物でなければならないのか」という（認知言語学の枠組みにおける）「根源領域の選択」とその隠喩体系が存在する「社会・文化的環境との相互作用」について観察した「ジェンダー言語態」に関する研究ではないからである。また、後者では、たとえば「*花子は男をつまみ食いするから気をつけなさい。」（平賀（1997: 120））といった文は「非文」として扱われている。しかしながら、筆者の経験上、近年、女性が同様の表現（たとえば「年下の男をつまみ食いばかりしているからこういう

ことになるのよ」など) を使用しているのを耳にする⁸。このギャップは時代の変化に伴ったものであり、女性の社会的地位の向上（もしくは男性の地位の低下）と無関係ではないであろう。こうした表現ばかりでなく、後述する「彼氏がいるのに他の男を漁っているらしいよ」, 「草食系男子」といった新しい表現群も同様のコンテキストに含まれる。ただ、ここで注目すべきは、たとえそこに対等な関係の構築が関与していたとしても、そうした女性がなぜ「食人表現を用いなければならないのか」という言語文化学的根拠の問題に再び行き着く。今まで女性の地位に対して迫害を引き起こしてきた男性社会への復讐心からであろうか、否、筆者はそうは思わない。やはり、女性・男性共にあくまでも「自然と」（すなわち恣意的ではなく）食人表現が共通して用いられている（もしくは用いられ始めている）のだから、性差だけではなく（後述する）「強者から弱者へ」という本能を媒介にした食人の原始性、すなわち「カニバリズム」認識が人間の無意識的意識（unconscious consciousness）に本来的に備わっていた、そして、それが「具現化した」と考えなければ論理に合わない。事実、平賀（1997）や熊抱（2006）が挙げている性差以外の表現（たとえば「あいつは人を食ったような態度をしている」（平賀 1997: 122）など）にもカニバリズム認識が反映されている場合もある⁹。誤解のないように再度述べておくと、平賀（1997）や熊抱（2006）は語彙に現れる性差を見る上で非常に優れた研究であり、筆者も多くの点で参考にした。また、それらで述べられているように、そうした性的カニバリズム表現は圧倒的に女性を対象としたものが多いことも事実であり、本稿もその趣旨に沿っている。しかしながら、上出の観点故に、食人表現の隠喩の「外側」に存在する根源領域選択の社会・文化的ゲシュタルトを言語の側面から明らかにしようとする点、また、それに伴い、そうした認識メカニズムが異言語間にまたがって存在している人間言語文化であるのかどうかという反証可能性の点で、本稿は性差も射程に捉えつつ、従来のジェンダー言語学の枠組みを超えた「言語態」とのインターフェイスとしての食人言語文化研究となる。

次に、以上の論を展開するには、その前提として「言語と文化」に関する如何なる見地に基づくべきかが問われるであろうが、その見解の一つとなるのがサピア=ウォーフの仮説（the Sapir-Whorf hypothesis）である。たとえば、以下（1）では「人々の生活観は言語に反映される」と提唱されている。

- (1) Human beings do not live in the objective world alone, nor alone in the world of social activity as ordinarily understood, but are very much at the mercy of the particular language which has become the medium of expression for their society. It is quite an illusion to imagine that one adjusts to reality essentially

without the use of language and that language is merely an incidental means of solving specific problems of communication or reflection. The fact of the matter is that the “real world” is to a large extent unconsciously built up on the language habits of the group.... We see and hear and otherwise experience very largely as we do because the language habits of our community predispose certain choices of interpretation.

— Carroll (ed.) (1956: 134) (下線筆者)

また、次の(2)に示されるように、認知言語学分野における経験主義の枠組みの中では「言語は人間の本性の産物」として捉えられている。

(2) Each such domain [= a basic domain of experience] is a structured whole within our experience that is conceptualized as what we have called an *experiential gestalt*. Such gestalts are experientially basic because they characterize structured wholes within recurrent human experiences. They represent coherent organizations of our experiences in terms of natural dimensions (parts, stages, causes, etc.). Domains of experience that are organized as gestalts in terms of such natural dimensions seem to us to be *natural kinds of experience*.

They are natural in the following sense: These kinds of experiences are a product of

Our bodies (perceptual and motor apparatus, mental capacities, emotional makeup, etc.)

Our interactions with our physical environment (moving, manipulating objects, eating, etc.)

Our interactions with other people within our culture (in terms of social, political, economic, and religious institutions)

In other words, these “natural” kinds of experience are products of human nature. Some may be universal, while others will vary from culture to culture.

— Lakoff and Johnson (1980: 117-118) (下線・[] 内表記筆者)

上記(1)–(2)それぞれの言語観についての是非もあろうが、話し手・書き手が属する社会・文化との相互作用によって人々の「モノの捉え方」が言語に反映されるという言語文化学的見地 (cf. 上野・森山 (2011)) もこれら2つの言語観に加味すれば、(性的) カニ

バリズムが原始的思想・行動様式の一つである限り、無意識の産物として言語表現に現れていたとしても何ら不思議ではない。事実、“sexual appetite”など、共感覚 (synesthesia) に近い形で、食から性への生体活動の感覚転移表現も存在している。ましてや、後者の認知言語学の枠組みでは、言語概念を生み出す「無意識的意識 (unconscious consciousness)」に光を当て、その経験のゲシュタルトを明らかにすることが言語研究の本質である (cf. Lakoff and Johnson (1999: 117-118))。したがって、倫理的な側面からも容認されないタブーであったとしてもカニバリズムがそこに潜む人間の本性の一つであるとするのであれば、それを直視することを恐れず、躊躇なくその認識が反映される言語メカニズムの解明を目指して愚直に邁進することも言語学者としての使命となろう。

そこで、本研究の鍵となり得る記載が2.1.における(2)-(7)である。上述したように、あくまでも「性的カニバリズムという原始的思想・行動様式が如何にして言語に反映されているか」という言語文化学的メカニズムを見つめることが本稿の趣旨であり、パリ人肉事件の司法判断の妥当性およびそこに至るまでのプロセスを検証・分析することが主たる研究目的ではない。したがって、これ以上の事件背景には触れないが、彼が率直に述べた真情は、脳内活動の結果事象である言語の側面から本性の原始産物(以下、「原始性」と記載)を見つめる上で示唆に富んでいる。特に、同箇所引用下線部から総じて得られる「性的カニバリズムは一般の人々が持つ肉欲の延長線上に存在しているが故に、生きている相手が十分条件となる。また、(世間一般でいう)愛情が性的快感に結びつかないが故に、内在性の感覚が必要条件となる」という点は後述する論旨と密接に関連する¹⁰。誤解のないように述べておくと、結果として不起訴処分となったとはいえ、被害者および被害者の遺族の方々の心情を慮ると筆者も極めて沈痛な思いを抱くばかりである。ただ、上述したように、認知言語学の枠組みにおいて人間の本性の産物が言語に反映されるメカニズムを明らかにすることが言語学者の使命である限り、たとえそれが現代文明社会で倫理的にタブーと見なされるモノであったとしても避けて通ることは能わず、2.1.における(2)-(7)のような現存するカニバリストの非倫理的真情も研究資料として扱わざるを得ない。

以上の研究理念に則り、言語文化も交えた認知言語学の見地から、あくまでも「言語の側面」から原始性の一つを見つめ、それが反映される「言語表現のメカニズム」の一端を明らかにすることを目的に本論を展開する。また、「人間の本性の産物は、言語形態の枠組みを超えて存在し得る」という人間言語文化 (cf. Lakoff and Johnson (1999: 117-118), 福森・森山 (2012)) の立場に基づき、日本語・英語・スペイン語・ルーマニア語表現を本研究の対象とする¹¹。

3. 人体の食物化

「性欲」の意を示す表現の一つに、英語では“sexual appetite”が挙げられ、同様の概念表示はスペイン語・ルーマニア語においても観察される。以下(1 a-c)がそれぞれの実例である。

- (1) a. Perhaps we will see more 70 to 80 years old people in the streets, who still have their *sexual appetite*.

これからは性欲を持ったままの70代、80代が街にあふれるかもしれない。

— *Hiragana Times*, 1998年11月号 (<http://www.hiraganatimes.com/>)
(アクセス: 2011年11月4日) (イタリック・下線筆者)

- b. スペイン語: Puede ser que vemos gentes viejas más de los años setenta a los ochenta en las calles, que todavía tienen su *apetito sexual*.

- c. ルーマニア語: S-ar putea să vedem din ce in ce mai mult pe străzi oameni între 70 și 80 de ani cu *apetit sexual*.

そして、通時的観点から見れば、appetiteの意味変化は「食欲」の原義に遡る。下記(2)がその詳細である。

- (2) 1. 《c1303》食欲. 2. 《a1349》欲求, 願望. 3. 《1373》性欲.

◆ ME *ap(p)etit* = AF *ap(p)etit* = OF *apetit* (F *appétit*: cog. It. *appetito*) □ L *appetitus* appetite, desire (p.p.) ← *appetere* to long for ← AP¹ + *petere* to seek (⇒ PETITION).

— 『英語語源辞典』(s.v. *appetite, n.*) (下線筆者)

ここに「性」を「食」の観点から見なす「欲の転移」事象が確認されるが、先に挙げた(性的カニバリズムに関する)種々の事件でも明らかのように、性欲が食行為として昇華される事例の多くが男性から女性への志向であり、その逆の流れではない¹²。さらに、一般成人男性であっても、日常生活でその性的志向が真っ先に向かう女性の身体部位は、通常、性器ではなく、胸部や臀部であろう¹³。こうした原始性がフレーム(frame)となる場合、女性の胸部が図(figure)として前景化され、「食物」的観点から認識されていたとしても何ら不思議ではない。次の(3)がその言語実例である。

(3) たわわな胸のボタンが、男の手によって、ひとつ、またひとつと外されていく。

— 『週刊大衆』 2009年3月9日号 (下線筆者)

「たわわ」は「撓む」に由来し、「弾力があってしなう」さま (cf. 『広辞苑』 (s.v. たわわ【撓】、たわむ【撓む】、たわたわ【撓撓】)) を表す。そして、以下 (4 a-b) の転移事象を観察する限り、そうした表現が用いられる背景には、「女性の胸部は (果) 実である」とする構造のメタファー (constructional metaphor) が存在しているようである¹⁴。

(4) a. 僕はたわわに実ったリンゴにそっと手を伸ばした。 <根源領域(source domain)>

b. 僕はたわわに実った胸にそっと手を伸ばした。 <目標領域(target domain)>

事実、次の (5 a-c) それぞれの言語実例に示されるように、英語・スペイン語・ルーマニア語においても同様のメタファー認識が存在している。

(5) a. She's got such great *melons* that I cannot avert my eyes from them.¹⁵

b. スペイン語: ¡Nunca había visto a una mujer con *melones* tan inmensos!

c. ルーマニア語: Tipa de acolo are niște *pepeni* atât de apetisante încât nu-mi pot lua ochii de la ele.¹⁶

しかしながら、ここで問題となるのが人間言語文化として「なぜ、女性の胸部が (果) 実として見なされ得るのか」というカリバニズム認識を支える言語メカニズムである。その謎を解くには、下記 (6) の通時的見地に立脚しなければならない。

(6) ◆ ME *trunke*, *tron(c)ke* □ (O)F *tronc* < L *truncum* (原義) stem deprived of branches; lopped off, maimed ~ ? IE **terə-* to pass through, overcome.

— 『英語語源辞典』 (s.v. trunk, n.) (下線筆者)

上記 (6) では、人間などの「胴体」(the main part of the human body apart from the head, arms and legs (OALD (s.v. trunk, n., 6))) を表す “trunk” の原義が “stem deprived of branches”, すなわち「幹」の意に遡ることが確認されるが、ここに、形状の類似性を通じた「胴体」と「幹」との「投影 (projection)」関係が浮かび上がる。

「投影」とは、無限の意味表示を有限の道具立てで行う「言語の経済性」に基づいた認知活動の一つである (cf. Lakoff and Johnson (1980: 54), 上野・森山・福森・李 (2006:

199-220))。換言すれば、「投影」とは、或る対象物を表すために既知のものの姿・形を利用する脳内活動であるが、その根源領域となる最も身近なものが自身の「身体」であることは言を俟たない。たとえば、その実例として以下 (7 a-c) が挙げられる¹⁷。

(7) a. Rose: Hi I can talk because I have a mouth. *My heel has a mouth.*

— 映画 *In Her Shoes* (2005) <01:32:13>¹⁸ (イタリック筆者)

b. Jeff: I want my money back. And I want angels to give it to me. And pixies to count it out, and a gnome or a hobbit or an elf to sleep at *the foot of my bed*, and have – I just want them all over my backyard.

— 映画 *Run Ronnie Run* (2002) <00:56:43> (イタリック筆者)

c. Spielberg: It was an older truck. *It had a face. The windows were the eyes and has a huge, protruding snout. The grill and the bumper are the mouth. It had a face. The other trucks on the back lot were the flat-nosed, blunted trucks.*

— 映画 *Duel* (A Conversation with Director Steven Spielberg on Making *Duel*) (1971) <00:06:26> (イタリック筆者)

身体性を基盤にした同様の活動は、日本語・スペイン語・ルーマニア語においても存在している。下記 (8 a-c) がそれぞれの言語実例である (cf. 上野・森山・福森・李 (2006: 199-220), 福森 (2011a))。

(8) a. 日本語：あたまを雲の上に出し 四方の山を見おろして

かみなりさまを下に聞く ふじは日本一の山 (童謡『ふじの山』より)

b. スペイン語：Tapé *la boca de la botella* con la mano.

c. ルーマニア語：*Hainele vorbesc* in locul tău.

逆に言えば、その指示関係の類似性 (およびその機能性) 故に、非身体部位から身体部位への投影事象も生じ得る。次の (9) – (10) がその言語実例である。

(9) Sid: Look, you won't even know I'm here. I'll just *zip the lip*.

— 映画 *Ice Age* (2002) <00:10:40> (イタリック筆者)

- (10) a. 日本語：はい、お口にチャックをしましょうね！
b. スペイン語：¡*Cremallera en la boca!*
c. ルーマニア語：Trage fermoarul la gură pentru că spui numai prostii.

こうした見地に基づくと、上出(6)で観察された「幹」から「胴体」へと意味変化を引き起こす動機づけ(trigger)には「投影」という認知活動が深く関与していると考えられるが、前者に付着する“branch”との概念的関係には注意を要する。下記(11)の史的事実を目を向けてみよう。

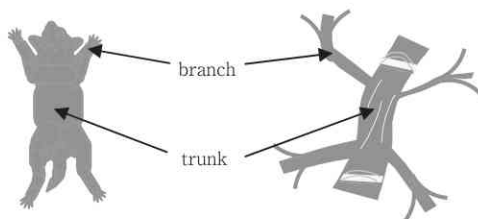
- (11) ◆ ME *bra(u)nch* = OF *bra(u)nche* (F *branche*) < LL *brancam* paw, claw (Prov. & Sp. *branca* claw / It. *branca* claw, paw) ~ ?.

— 『英語語源辞典』(s.v. *branch, n.*) (下線筆者)

ここでは、branchの原義が“paw”や“claw”，すなわち「(動物・獣などの)手足」の意に遡及することが観察される。したがって、以下(12)–(13)の言語事実および各々の概念化からは、「(胴体を中心として手足が付着している)動物の姿・形」を根源領域とした人間の脳内活動の発達プロセスが導き出されることになる。

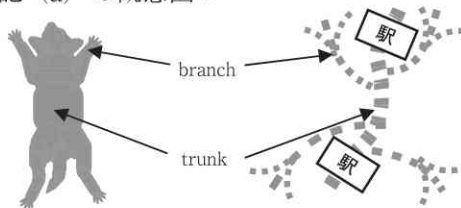
- (12) a. the *trunk* and *branches* of a river

b. 上記(a)の概念図：



- (13) a. the *trunk* and *branches* of a rail line

b. 上記(a)の概念図：



しかしながら、ここでさらに注意すべきことは、“the main part of the human body apart

from the head, arms and legs” (OALD (s.v. trunk, n. 6)) とも定義されるように, “trunk” に「『人間の胴体』の意が付加されるのであれば, 『人間の手足』も branch(es)で概念化し得る」という認識上の論理である。事実, 「人間の腕が枝として概念化され, さらに, その先端部である指は葉に相当する」という投影活動の拡張認識が, 次の (14) の言語実例に反映されている¹⁹。

(14) Therapist: *Let your arms be the branches. Feel the strength of those branches. Reach. Reach all the way up into the sky. Very good. Let the wind blow the leaves, and let your fingers be the leaves.*

— 映画 *Girl, Interrupted* (1999) <00:55:55> (イタリック筆者)

さらに, 木の表面 (特に幹の上部や枝部) を「覆う」ものは「葉」である。したがって, 以下 (15a-b) に示されるように, 人間の身体を「覆う」肌も, 「葉」を根源領域として見なし得る²⁰。

- (15) a. みずみずしい若葉 <根源領域>
b. みずみずしい肌²¹ <目標領域>

こうした認識は, 「(植物が) 青々と茂った」の意を持つ lush が俗語として「なまめかしい」の意で用いられ (cf. 『ジーニアス英和辞典』 (s.v. lush¹, adj., 2)), かつ, 下記 (16) が示すように, その原義が “soft and watery” に遡及する史的事実と並行する²²。

- (16) ◆ ME *lusch* loose, relaxed, soft (変形) ~ ? *lache, lashe*, slow, loose, soft and watery (of plants) □ OF *lasche* (F *lâche*) □ *laxus*, loose (⇒ LAX²): cf. (方言) *lash* soft and watery.

— 『英語語源辞典』 (s.v. lush¹, adj.) (下線筆者)

ここでようやく, 前出 (3)–(4) で問題となっていた「なぜ, 女性の胸部が (果) 実として見なされ得るのか」という性的カリバニズム認識について, その言語メカニズムが明らかとなる。人間の胴体は幹として, 手足はそれに付着する枝として概念化される投影認識を観察した。つまるところ, 人間の身体が「木」そのものとして概念化されるフレームが存在するのだから, 女性の胸部は木に付着する植物由来の食物でなければならない。この必要条件に [+形状の類似] および [+ (重力に抗うかのように) しなう物] という

投影認識も相まって、まさに「乳房」が「子房」として見立てられる食用認識が生じるのである²³。

(次号に続く)

[謝辞] 末筆となりましたが、近畿大学法学部 田邊 義隆 先生（英語教育学）、福井工業大学教養部 入学 直哉 先生（言語学）には本シリーズの拙稿の隔々までお目通し頂き、貴重なご助言ばかり頂きました。この場をお借りして心からお礼申し上げます。

< Notes >

- 1 「ブローニューの森の猟奇事件」とも呼ばれる。なお、この事件が如何に欧州の人たちに衝撃を与えたかについては、それをモデルにザ・ローリング・ストーンズが12インチシングル *Too Much Blood* (1983年) の楽曲をリリースしたことからも窺い知れる。この楽曲はアルバム『アンダーカヴァー』(1983年)にも収録されている。
- 2 新谷 (1992: 42-43) には、「骨噛み」に関する以下 [1] の記述が見られる。

[1] この四十九餅の伝承にもかなりの地方差があるが、ほぼ共通しているのは次のような点である。

まず第一に、その名のとおり四十九個の小餅ということである。そしてそれに笠の餅とか親餅などといって、一枚の大きな餅が一緒に²搗かれるのがほとんどである。四十九個の小さな丸餅は死者のためのもので、死後、四十九日間一日一個ずつあげるものとする伝承が古風を伝えているように思われる。一方大きな餅の方は、近親者で引っ張り合ってちぎって食べるとか、一升瓶の底で切って分けるとか、鍋蓋の上のせて包丁で切るとかいたり、しかもそのとき敷居をまたいでするという例などもあり、死者との食い別れのための所作であるとみられる伝承が顕著である。… 一方、この笠の餅とか親餅とか呼ばれる大きい餅の場合、少し気になる奇妙な伝承もある。それは、この餅が死者の身体に擬せられているということである。死者の手の形だとか足の形だとかいっていたり、人間の形に切って分けて食べるのだとかいったり、大きい笠が胎盤で、小さい四十九の餅が人体の骨であるとか、とにかく、この餅を人間の身体に擬してそれを食べるというような伝承が、とくに西日本各地にわずかずつではあるが点在しているのである。

これらの伝承から、すぐに日本にも古くは食人の風習があったのではないかと、葬送に際して骨を嚙む風習があったというような推論に結びつけるのは無謀かもしれない。しかしこの興味深い伝承の背後には何かがありそうである。

— 新谷 (1992: 42-43) (下線・一部省略筆者)

さらに、次の [2] のように続けている。

[2] その何かをさぐるためには今ではもうほとんど失われてしまったような伝承にも注意をひろげる必要がある。たとえばアウトローの「闇の社会」の伝承である。日本のいわば「闇の社会」には今もって特殊な骨かみの習俗が脈々と伝えられているということにも注意しておいてよいことと思われる。

— 新谷 (1992: 43-44) (下線・一部省略筆者)

そして、その『「闇の社会」に今もって脈々と伝えられている特殊な骨かみの習俗』について、下記 [3] の事例が紹介されている。

[3] 山折哲雄「『死』の民俗について」(『民俗フォーラム』創刊号 昭和六十年) には昭和六十年一月に暴力団山口組の竹中組長が暗殺されたとき、ある新聞にのった次のような記事が紹介されている。

犠牲者の骨あげがおこなわれたのは、神戸市市内の鶴越火葬場であったが、そのとき直系の組員たちは竹中組長の遺骨を代わる代わるしゃぶって報復を誓った。実は、これには因縁めいた前日談があった。昭和五十一年十月、大日本正義団の吉田会長が大阪で射殺されたさい、その部下の組員鳴海清が同じことをやっている。会長の骨を砕き、その粉末を酒に入れ、一息に飲んで報復を誓ったというのである。やがてかれは、その誓いのとおり、山口組の組長だった田岡一雄を狙撃し、逃亡中に惨殺された。

— 新谷 (1992: 61) (下線筆者)

- 3 中国では、古くから「医療目的」で人肉を食べる習俗があったことが指摘されている (cf. 吉岡 (1989: 273-276))。また、日本でも、それに類する行為が行われていたことも指摘されている (cf. 吉岡 (1989: 285-287), 礫川 (1997: 14-15, 326-332))。
- 4 臓器移植の本質がカニバリズムであることは、栗屋 (1999) 以前に Attali (1979) や 鷺田 (1988) ですでに指摘されている。また、鷺田 (1988) では、臓器移植が本物のカニバリズムにつながることもすでに指摘されている。
- 5 救出作業の際に牛の干し肉が支給されていたにも拘わらず、最後の被救出者は引き続き乗客遺体の人肉を食べていたとする報告もある (cf. ブレア Jr. (高田 (訳)) (1978))。

- 6 大高 (2006: 113) には, Goya が描いた Saturno devorando a un hijo の絵に, カニバリズムと性欲との関係を示す一文が見られる。次の [1] にその一節を記す。

[1] 自分の子に支配権を奪われるとの大地母神の予言により, サトゥルヌス (農耕神) は生まれてくる子を相次いでむさぼり喰らう。… 修復前の写真では男性器が勃起していたという。

— 大高 (2006: 113) (下線・一部省略筆者)

- 7 Attali (1979) では, 本来はカニバリズムを封じる側であるキリスト教にも, その根底にはカニバリズム的思想が存在していることが指摘されている。以下 [1] にその一節の日本語訳を記す。

[1] キリスト教による供犠の講演は, 神の病いを祓い, カニバリズムを忘れさせるものであるとはいえ, それをすっかり消し去っているわけではない。キリスト教の基本的な儀礼である聖餐に至るまで, それは現前しているのだ。ヨハネがパンを「キリストの体」と言い, ぶどう酒を「キリストの血」と言う時, そこにカニバリズムを認めないわけにはゆかない。「人の子の肉を食べず, また, その血を飲まなければ, あなたがたの内に命はない。わたしの肉を食べ, わたしの血を飲む者には, 永遠の命があり, わたしはその人を終わりの日によみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物, わたしの血はまことの飲み物である。わたしの肉を食べ, わたしの血を飲む者はわたしにおり, わたしもまたその人におる。生ける父がわたしをつかわされ, また, わたしが父によって生きているように, わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう。天から下ってきたパンは, 先祖たちが食べたが死んでしまったようなものではない。このパンを食べる者は, いつまでも生きるであろう」〔ヨハネによる福音書, 第六章〕。

— アタリ (金塚 (訳)) (1984: 56-57) (下線筆者)

- 8 事実, 以下 [1 a-b] に示されるように, ウェブ上では男性を食行為の対象とする記述が氾濫している。

[1] a. でも, 先日行われたリオのカーニバルでは, イチャイチャとダンスする様子が目撃され, 関係は続行中と思われていましたが, どうやらマドンナ, ジーザス以外にも年下男性をつまみ食いしているみたい!? … 恋愛対象として年下男性が好み … というよりも, 年下男性からエネルギーを吸収したいだけなのかも!?

— 『Time Warp 毎日届く海外エンタメ情報サイト』

(<http://www.timewarp.jp/gossipscoop/2010/03/10/5472/>)

(アクセス: 2012年1月15日) (下線・一部省略筆者)

b. さらに、沢尻がメンバーの友人や彼氏をつまみ食いすることもあったようで、そこからメンバー同士の関係も悪くなっていったようだ。

— 『芸能情報インサイド』

(<http://enta-inside.seesaa.net/article/44286311.html>)

(アクセス: 2012年1月15日) (下線筆者)

上記はやや男性視点に立つ口語表現に感じられつつも、社会情勢の変化に伴ってそれらが違和感なく読者に受け止められているのであれば、ジェンダーの枠を超えた男女共通に存在する「食人性」としての言語態に目を向けざるを得ない。

- 9 性差に関わらないカニバリズム認識が反映された他の表現として「騙した相手を骨の髄までしゃぶり尽くそうとする彼／彼女の人格は信用に値しない」なども挙げられる。
- 10 ここでの「内在性」とは対象者を自身の生活領域内（すなわち同類的存在）に同定させる感覚。詳しくは後述。
- 11 本シリーズでスペイン語・ルーマニア語各々の言語実例を採用した理由は、英語はゲルマン語族に属するものの、以下 [1] にも見られるように、Norman Conquest 以降、1万語もの語彙がラテン語から借用された事実から、ラテン語由来言語との比較・対照がローマ・アルファベット言語圏における母語話者の認識を浮き彫りにしやすいと考えたことによる。

[1] ノルマン人の征服以前に英語に入ってきたフランス語は castle「城」, pride「誇り」, tower「塔」など数語にすぎなかったが、13世紀初めから徐々に増加し、1350-1400年に頂点に達した。中英語期だけでじつに1万語もの借入語が英語に入ってきた、しかもそのうち7500語が今日の語彙に残っている。

— 中尾 (1989: 59) (下線筆者)

個別に言えば、スペイン語はフランス語と同様、ラテン語から派生したイタリック語派に属する言語である。そこで、このフランス語語彙を介するようにして、スペイン語と英語との間に語の形とその意味との類似性が顕著に観察されると考えられる。他方、ルーマニア語はギリシア語・スラブ語・ハンガリー語・トルコ語・フランス語などの借用語彙が多く、かつ、文化的にローマ・カトリックの影響をほとんど受けていない特異な言語であることから、ローマ・アルファベット言語の中でも比較的英語と異なる言語として原始性の異同を参照するのに大きな役割を果たすと考えられる。

また、本シリーズで用いられているすべてのスペイン語・ルーマニア語実例は、それぞれの母語話者のチェックを受けている。なお、後者のルーマニア語における概念

については、森山智浩の計4回に渡る現地学術調査（調査期間、第一回：2008年8月5日～9月4日、第二回：2009年8月5日～9月4日、第三回：2010年2月12日～26日、第四回：2011年2月11日～3月9日）で明らかになった研究成果の一部を活用しており、第四回学術調査は在外出張として近畿大学より援助協力を受けている。以下の方々にはルーマニアの言語文化・習慣・伝統等に関する様々な知識を教授頂き、常に温かく支えて頂いている。

[2] Nicolae Mirică（電気エンジニア・男性・51歳）、Emanuela Mirică（小売商・女性・46歳）、Oana Moriyama（心理学士・女性・27歳）、Bogdan Mirică（オペラ歌手・男性・26歳）、Valentina Moldovan（バレリーナ・女性・26歳）、Daniela Moldovan（バレリーナ・女性・26歳）、Enache Niculina（機織手・女性・72歳）、Viorica Mirică（無職・女性・71歳）、Gheorghe Chingaru（不動産・男性・50歳）、Adriana Chingaru（家政婦・女性・47歳）、Radu Chingaru（大学生・男性・27歳）、Alin Manea（エンジニア・男性・45歳）、Mihaela Manea（教授（地理学）・女性・42歳）、Evelin Manea（大学生・女性・23歳）、Gabriela Manea（大学生・女性・20歳）、Sorin Moise（ルーマニア軍大佐・男性・41歳）、Mirela Moise（企業秘書・女性・38歳）、Mircea Mirică（工場長・男性・37歳）、Raluca Mirică（家政婦・女性・35歳）、Adrian Mirică（学生・男性・14歳）、Andreea Marinescu（コンピュータ技師・女性・28歳）、Andreea Dragoteanu（学生・女性・18歳）、Bogdan Drăgan（オペラ歌手・男性・29歳）、Gabriela Suciuc（バレリーナ・女性・31歳）、Miruna Moldoveancu（バレリーナ・女性・25歳）、Grancea Marius（ダンサー・男性・30歳）、Ivascu Cosmin（写真家・男性・29歳）、Dumitru Elena Daniela（モデル・女性・24歳）

さらに、当該現地調査期間も含め、故 森山元嗣（2009年2月逝去）・故 国澤澄子（2011年1月逝去）・故 森山さくら（2008年9月逝去）諸氏には常に多大な協力・支えを頂いた。以上の方々には、この場を借りて心から深くお礼申し上げます。

- 12 本稿の主題ではないので詳しい考察・論証は行なわないが、それを引き起こす主たる要因を観察する上でカニバリズムは男性と女性との二項対立で考えるのではなく、「強者から弱者へ」行なわれることが典型的であることを見逃してはならない。確かに、自然界では、（人間以外の）動物で雌が雄を食する行為は見られる。しかしながら、ここでも「強者から弱者へ」という法則は依然として生きている。なお、私見ではあるものの、人間界において「強者と弱者」とを仕切る基準は多分に社会的地位にあると思われるが、近年の日本では、女性の社会進出によってその社会的地位が向上

している。このような背景も相まって、（特に若年層の）女性が男性に対して「食う＝性行為をする」という表現が用いられるようになったと考えられるが、カニバリズム認識のプロトタイプは男性から女性への方向性であるという趣旨の下、引き続き論を展開する。

- 13 パリ人肉事件において、被害者の遺体は胸部ならびに臀部を中心に食されているが、本論 2. 1. の (3)–(4) および (6) はまさに、本来目標領域である肉体関係に転移すべき性的志向が“appetite”という根源領域そのものに留まってしまった事例として捉えられる。
- 14 事実、この構造のメタファーを通して造られた「メロンパイ」や「スイカップ」といったかばん語 (portmanteau word) も観察される。また、女性の臀部を「桃尻」と表現するときも同様のメタファーが生きている。なお、「マシュマロのような胸」のように、(多分に触覚から得られた) 非果実表現を用いて女性の胸部に言及される場合もあるが、そこにも「食物」的観点から性的志向を表すカリバリズム認識が依然として存在している。
- 15 女性の胸部に言及する“mangos” (米俗)、“pears” (豪俗) 等にも、同様の性的食物化認識が観察される。また、容器のメタファー (container metaphor) を通して、その (認識上の) 内容物が前景化された同様の性的食物化表現の一つに“honeydew”が挙げられる。なお、“She lost her *cherry*.” など、処女の喪失事象にも食物化認識が反映される場合がある。
- 16 ルーマニア語 *pepen* (英訳: melons) の代わりに、*mere* (英訳: apples) など他の果実用語も用いられる。
- 17 Lakoff and Johnson (1980: 54) では、「投影」は新奇な表現を生まない「死喩 (dead metaphor)」として規定されているが、筆者はそうは思わない。なぜなら、本論 § 3 の (8) などは、いわゆる「固定化された表現」の範疇を明らかに逸脱した投影事象として捉えられるからである。なお、本論 § 3 における考察しかり、以下 [1] における概念転移しかり、「投影」に基づく研究は、姿・形の類似性をスキーマとした固定化表現の内的構造ばかりに目をむけるだけでなく、それをを用いて如何なる外的構造を明らかにすることができるのかというフレーム研究にまで視野を拡大すべきである。

[1] The sun *rises* in the east and *sets* in the west.

上記 [1] のように、太陽の上昇および下降が一つの文中内で表されるとき、通常、“rise-set” のペアのみが最も自然な表現と見なされる (たとえば “rise-sink” のペアは不自然)。これは、「円」という形状の類似性を通して「太陽」が「人間の顔」に見

立て得ること，さらに，この投影活動が故に，“The sun *rises* in the east”が「太陽が東の空間で立ち上がる／身を起こす」，“(the sun) *sets* in the west”が「(立ち上がったと見立てられた)太陽が西の空間で座る」行為として概念化されていることによっている。さらに詳しくは上野・森山・福森・李（2006: 46-57）参照。

- 18 < >内の数字はそれぞれ，その台詞が当該映画・インタビュー内で生起する<時間数・分数・秒数>を表す（なお，テレビ映画の場合は生起タイムを記載しない）。以下同様。
- 19 日本語でも，「腕神経叢の前枝」(anterior divisions of *brachial* plexus) など，同様の投影活動が観察される。
- 20 物理的には木の表面を覆う物は木の「皮」であって葉ではない。しかしながら，認識世界と客観的世界を区別する認知言語学およびゲシュタルト心理学の枠組みでは，参与者の中でも通常，色鮮やかなものの方がそうでないものよりも前景化する。したがって，本論で観察したカニバリズム投影の認識をここに加味するのであれば，葉が多く茂った木々の集まりには通常多くの果実が実るなど「食物の豊富さ」，ひいては食欲を刺激して満たすだけの「食物の適度な大きさ」が連想される自然環境のフレームにたどり着く。このようなカニバリズム認識の転移事象が反映された実例の一つに以下 [1 a-b] が挙げられる。

[1] a. Esto es *bosque exuberante*. (ここは豊かな森だ)

b. Ella es *mujer exuberante*. (彼女は豊満な女性だ)

- 21 その「若々しさ」ならびに「新鮮で生氣のある様」が，後述する（果）物のカニバリズム認識と相まって，本論 2. 1. における（6）の「特に6月みたいに女性が肌を見せ始める季節になると，食いたくて食いたくてしょうがなくなっちゃう」という真情に結びつくと考えられる。
- 22 同概念を表示する語として，スペイン語では“lozano” (cf. 『小学館 西和中辞典』 (s.v. lozano, na)), ルーマニア語では“luxuriant” (cf. *DER* (s.v. lush)) が挙げられる。
- 23 言うまでもなく，「メロン」は木に実るが，先に触れた日本語の造語「スイカップ」のように，木には実らない果実もその投影表現に用いられる場合がある。しかしながら，認知言語学のカテゴリー論で言えば，それはあくまでもそのカテゴリー内の「周辺的位置」に属するプロトタイプ拡張 (prototypical extension) の産物である。つまり，原始時代をイメージすればわかりやすいが，通常，女性の胸部の形状および大きさに投影されるようなプロトタイプの果実は木に実るものであって，地面に位置するような果実と混同してはならない。

【参考文献】

<学術図書・学術論文>

- Arens, W. (1979) *The Man-Eating Myth — Anthropology and Anthropophagy —*. Oxford: Oxford University Press. (アレンズ, W. (折島正司 (訳)) (1982) 『人喰いの神話 — 人類学とカニバリズム —』岩波書店: 東京.)
- Attali, J. (1979) *L'ordre Cannibale — Vie et mort de la médecine —*. Paris: Bernard Grasset. (アタリ, ジャック (金塚貞文 (訳)) (1984) 『カニバリズムの秩序 — 生とは何か / 死とは何か —』みすず書房: 東京.)
- Bataille, G. (1973) *Théorie de la religion*. Paris: Éditions Gallimard. (バタイユ, ジョルジュ (湯浅博雄 (訳)) (2002) 『宗教の理論』(ちくま学芸文庫 ハ-12-3) 筑摩書房.)
- Bataille, G. (1977) *L'érotisme*. Paris: Hatier. (バタイユ, ジョルジュ (酒井健 (訳)) (2004) 『エロティシズム』(ちくま学芸文庫 ハ-12-5) 筑摩書房.)
- Carroll, John B. (ed.) (1956) *Language, Thought, and Reality — Selected Writings of Benjamin Lee Whorf —*. Cambridge; Massachusetts: The M.I.T. Press. (ウォーフ, B. L. (池上嘉彦 (訳)) (1993) 『言語・思考・現実』(講談社学術文庫 1073) 講談社: 東京.)
- Hagen, Rose-Marie and R. Hagen (2003) *Francisco Goya (1746-1828)*. Taschen: Köln. (ハーゲン, ローゼ=マリー, ライナー・ハーゲン (ワタナベ, レイコ (訳)) (2004) 『フランシスコ・ゴヤ』(ニューベーシック・アート・シリーズ) タッシェン・ジャパン: 東京.)
- Harris, M. (1977) *Cannibals and Kings — The Origins of Cultures —*. New York: Random House. (ハリス, マーヴィン (鈴木洋一 (訳)) (1997) 『ヒトはなぜヒトを食べたか — 生態人類学から見た文化の起源 —』(ハヤカワ・ノンフィクション文庫 NF-210) 早川書房.)
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh — The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought —*. New York: Basic Books.
- Sanday, Peggy R. (1986) *Divine Hunger — Cannibalism as a Cultural System —*. Cambridge: Cambridge University Press. (サンデイ, ペギー・リーブズ (中山元 (訳)) (1995) 『聖なる飢餓 — カニバリズムの文化人類学 —』青弓社: 東京.)

- 栗屋剛 (1999) 『人体部品ビジネス』 (講談社選書メチエ 169) 講談社: 東京.
- 上野義和・森山智浩 (2011) 「異言語教育と言語文化 (その2) — FD改革下における語学教育のあり方を巡って —」 『京都外国語大学研究論叢』 第76号, pp. 1-21, 京都外国語大学国際言語平和研究所: 京都.
- 上野義和・森山智浩 (2012 (近刊)) 「異言語教育と言語文化 (その3) — 応用言語学・法言語教育・言語文化教育の学際的観点から —」 『京都外国語大学研究論叢』 第78号, 京都外国語大学国際言語平和研究所: 京都.
- 上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 (2006) 『英語教師のための効果的語彙指導法 — 認知言語学的アプローチ —』 英宝社: 東京.
- 大高保二郎 (2006) 『ゴヤ』 (西洋絵画の巨匠 10) 小学館: 東京.
- 熊抱ゆかり (2006) 「言語とジェンダー — 日英語に表れる性差 —」 『福岡大学人文論叢』 第38巻 第1号 (通巻148巻), pp. 215-229, 福岡大学研究推進部: 福岡.
- 小山田義文 (2002) 『ゴヤ幻想 — 『黒い絵』の謎 —』 三元社: 東京.
- 中尾俊夫 (1989) 『英語の歴史』 (講談社現代新書 958) 講談社: 東京.
- 新谷尚紀 (1992) 『日本人の葬儀』 紀伊國屋書店: 東京.
- 平賀正子 (1993) 「品物としての女: メタファーにあらわれる女性観」 『日本語学』 Vol. 12 (5月臨時増刊号 (『世界の女性語・日本の女性語』)) pp. 213-223, 明治書院: 東京. (井出祥子 (編) (1997) 『女性語の世界』 (日本語学叢書) pp. 114-126, 明治書院: 東京. に再録)
- 福森雅史 (2011a) 「認知言語学アプローチによるスペイン語彙学習・指導の新提案 — 「投影」の導入 —」 『立命館言語文化研究』 22巻4号 (通巻104号) pp. 197-215, 立命館大学国際言語文化研究所: 京都.
- 福森雅史・森山智浩 (2012) 「時の世界と人間の認識 — 英語・スペイン語・ルーマニア語時間表現への認知言語学的アプローチ —」 『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)』 第2巻, 第1号, pp.41-76, 近畿大学教養・外国語教育センター: 大阪.
- ブレア Jr., クレイ (高田正純 (訳)) (1978) 『アンデスの聖餐』 (ハヤカワ文庫 NF20) 早川文庫: 東京.
- 山折哲雄 (1985) 「「死」の民俗について」 『民俗フォーラム』 創刊号, 国立歴史民俗学館: 東京.
- 吉岡邦夫 (1989) 『身体文化人類学 — 身体変工と食人 —』 雄山閣出版: 東京.
- 吉田集而 (1988) 『不死身のナイティ — ニューギニア・イワム族の戦いと食人 —』 平凡社: 東京.

鷲田小彌太 (1988) 『脳死論 — 人間と非人間の間 — 』 三一書房：東京.

< 辞書 >

[OALD] : Hornby, A. S. (ed.) (1995) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. London: Oxford University Press.

高垣敏博 他 (編) (2007) 『小学館 西和中辞典』 (第2版) 小学館：東京.

寺澤芳雄 (編) (1999) 『英語語源辞典』 研究社：東京.

新村出 (編) (1998) 『広辞苑』 (第5版) 岩波書店：東京.

< DVDs >

Duel (A Conversation with Director Steven Spielberg on Making *Duel*) (邦題 『激突!』)
(1971: Universal Pictures)

Girl, Interrupted (邦題 『17歳のカルテ』) (1999: Sony Pictures)

Ice Age (邦題 『アイス・エイジ』) (2002: Twentieth Century Fox Film)

In Her Shoes (邦題 『イン・ハー・シューズ』) (2005: Twentieth Century Fox Film)

Run Ronnie Run (邦題 『ラン・ロニー・ラン』) (2002: New Line Home Video)

< Websites >

Hiragana Times, 1998年11月号

(<http://www.hiraganatimes.com/>)

“WHO'S HUNGARY?” VICE MAGAZINE

(<http://www.viceland.com/jp/v5n6/htdocs/whos-hungry-502.php>)

『芸能情報インサイド』 (<http://enta-inside.seesaa.net/article/44286311.html>)

『Time Warp 毎日届く海外エンタメ情報サイト』 (<http://www.timewarp.jp/gossipscoop/2010/03/10/5472/>)

「中国産の人肉カプセル密売 ソウルの薬剤市場と韓国誌」『MSN 産経ニュース』 (2011.7.21)

(<http://sankei.jp.msn.com/world/news/110721/chn11072123320011-n1.htm>)

< Songs >

“Too Much Boon” (in album: *Undercover*) sung by The Rolling Stones (1983)

『ふじの山』 (作詞：巖谷小波 作曲：文部省唱歌)

<その他>

『週刊大衆』（2009年3月9日号）双葉社：東京.

『読売新聞』（1981（昭和56）年6月17日（水曜日）朝刊）読売新聞社：東京.